巻き込んで展開した企画展
―藤沢市湘南台文化センターこども館平成30年度企画展の実施報告―

藤沢市湘南台文化センターこども館　二階堂　宏範

はじめに

藤沢市湘南台文化センターこども館（以下、こども館）は、毎年、夏休み特別企画展（以下、企画展）を実施している。過去3年の企画展の状況としては、いずれも45日間実施し、平均すると来場者数は16,340人となっている。実施する内容については、こども館がこどもを対象とした博物館（正確には、博物館類似施設）であることから、こども達の興味や関心が持てるものに出会える場の役割を有しており、人文系や自然系などジャンルを問わず実施している。

平成最後の企画展は、「わくわく！ドキドキ!ジュラシックヒーローズ～こども館恐竜展～」（以下、恐竜展）と題して恐竜をテーマに2018年（平成30年）7月14日から9月2日までの48日間実施し、23,293人の来場者があった。恐竜展の最大の特徴は、企画から館外の人を計画的に巻き込み展開した点である。

恐竜をテーマにした企画展実施の理由と課題

2018年（平成30年）にこども館が恐竜をテーマとした理由については、天文と恐竜をテーマにした全天周映画（プラネタリウムのドームを使って上映する映画）「ジュラシック・ヒーローズ～星空の警備隊～（株式会社D&Dピクチャーズ）」（以下、全天周映画）の天文分野の制作に携わり、こども館が日本初上映になること、2014年（平成26年）に神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、地球博）が林原自然科学博物館から教育活動に使われていた恐竜の標本を大量に受贈し、こども館でも借用可能な標本であるとの情報を得ていたことの2点からである。

恐竜をテーマにする企画展の実施については、早い段階で決定したが、課題も同時に明確になった。「こども館には、恐竜の知識を有した人がいない。」この課題の解決は、「知識を有した人を巻き込む」ことで解決を図った。

恐竜展の礎となった事業

恐竜展を実施するに当たって、次の二つの事業の経験が礎となった。

一つ目は、2011年（平成23年）3月24日から27日までの4日間実施した「「はやぶさ」帰還カプセル展示～宇宙の旅☆7年のキセキ～」（以下、はやぶさ展）である。

はやぶさ展は、2010年（平成22年）6月13日に小惑星イトカワの表面サンプルを持ち帰った小惑星探査機はやぶさの実物帰還カプセルを展示した事業である。日本国内125機関の応募の中から16機関が選ばれ、最後の会場にこども館が選定された。当時、小惑星探査機はやぶさの人気は尋常ではなかった。準備期間3箇月程度でこども館史上最大級の事業となり、日本で初めて帰還カプセルの展示を実施した相模原市立博物館、近鉄グループと共同開催で実施した大阪市立科学館、小惑星探査機の開発に携わったNECなど人的繋がりをいかして多くの人を巻き込みながら準備を進めた。実施直前の3月11日には、東日本大震災が起こり、計画停電の中での準備や人員配置計画の見直しなど想定外の問題も発生したが延べ102人の大学生のボランティアなどの協力もあり、はやぶさ展は、4日間で9,874人の来場者を集め、無事終了することができた。

二つ目は、2013年（平成25年）7月20日から9月1日までの44日間実施した企画展「びっくり!?ムシムシ昆虫ワールド」（以下、昆虫展）である。

昆虫展は、テレビ朝日やNHKで放送されたアニメ「秘密結社鷹の爪」とコラボレーションを行い、筆者が初めて1人で担当する企画展となった。昆虫展を実施する年の5月に国連食糧農業機関（FAO）が食糧危機の対策として昆虫食の報告を発表したことから、「昆虫を食べる」を昆虫展の一つのテーマとして「食虫植物の生体展示」、「昆虫を食べる動物の標本展示」、「扉を開けると料理された昆虫が入っている冷凍庫展示」などで、昆虫展でありながら昆虫の標本は、ドイツ型標本箱の二つだけといった変わった切り口の展示

を多摩動物公園（昆虫園）、地球博、箱根町立湿性花園、新江ノ島水族館、日本大学生物資源科学部博物館を巻き込みながら実施し、24,815人の来場者で終えた企画展である。

はやぶさ展と昆虫展のいずれも多くの人を巻き込みながら実施した事業であったが、準備期間が3箇月程度と短い期間であり、枠組みをつくった中に、巻き込んだ人達の知識を詰め込んでもらうような形で展開したものであった。

恐竜展は企画から巻き込む

2016年（平成28年）12月に平成30年度の企画展の担当者が決定し、恐竜展が始動した。はやぶさ展や昆虫展と違い、準備に早く着手できたことで、恐竜展では、枠組みをつくる企画の段階から巻き込んで展開した。これは、企画段階から参加してもらうことにり、こども館史上今までにない恐竜展になることを狙ったものである。

恐竜展の参画者については、地球博の古生物担当学芸員大島光春氏、こどもの頃からの恐竜好きが高じて地質の分野に進んだ藤沢在住の平塚市博物館学芸員野崎篤氏の2名の恐竜の知識を有した人の他に、こども達により面白くより楽しく伝えるためのアプローチを参考にするため新江ノ島水族館の北嶋円氏にお願いした。

参画者の意見の集約は、2017年（平成29年）の3月、7月、11月に会議を行い、基本方針を決定し、12月に野崎氏と筆者とで必要な恐竜の標本の選定を行い、2018年（平成30年）1月に恐竜展の企画案をまとめた。

恐竜展の企画案をまとめる中で、鳥類、ほ乳類、隕石についても触れる内容となることから、いずれも地球博の学芸員である加藤ゆき氏、広谷浩子氏、山下浩之氏の3名の協力を得る必要があり、さらに人を巻き込んで展開した。また、今回の企画展には、体感できる展示物を作りたかったので、脳の形、重さ、大きさを模した人形の「脳ぐるみ」を制作する作家の柴田美奈子氏も巻き込み恐竜展の最終企画書ができあがり、内容が確定した。

恐竜展の展示構成とその内容

恐竜展は、「三つの楽しいがある展示」にした。大量の展示物や見栄えのする展示物などで「にぎやかで楽しい」、全天周映画と内容を連動させることでそれぞれを見て「つなげて楽しい」、展示物をよく観ると「発見があって楽しい」と、来場のたびに見方が変わる展示に仕上げた。

図１　恐竜展の風景

展示構成は、7つのコーナー、68種類116点の展示物、18枚の解説パネルで構成した。7つのコーナーそれぞれの名称と内容については、次のとおりである。

1 鳥は恐竜!?

約6600万年前の大量絶滅を乗り越えて恐竜の一部は、現在でも「鳥」として私たちの身近に存在している。全天周映画の冒頭で科学技術によってニワトリの卵から恐竜が誕生するシーンがあることから、ニワトリとニワトリ卵殻を展示するほか、恐竜の卵、現存する鳥類最大の大きさを持つダチョウの卵、色が特徴のエミューの卵を比較する展示を行った。現存する最小の恐竜と最大級の恐竜としてハチドリとヒクイドリの標本の展示を行い、鳥と恐竜の繋がりを伝えた。

2 人と恐竜

人とティラノサウルスの頭骨と脳の標本を展示して比較するコーナー。見る展示だけでなく、地球博から脳ぐるみ作家の柴田氏を紹介してもらい、柴田氏に人の脳を模した「ヒト脳」とティラノサウルスの脳を模した「ティラ脳」の2種類の「脳ぐるみ」を制作してもらい、体感できる展示にもした。

3 恐竜の形

全天周映画の主要なキャストとして登場するパキケファロサウルス、トリケラトプス、ステゴサウルス、ティラノサウルスの特徴あるパーツのほか、いろいろな形をもつ恐竜を展示することで恐竜の形の多様性を伝えた。

4 肉食と植物食

肉食と植物食の食性で恐竜を分けてそれぞれの

歯を展示し、特徴を伝えた。また、全天周映画の食事のシーンにおいて、肉食恐竜のティラノサウルスと植物食恐竜のトリケラトプスの会話の中で話題になっている「恐竜の胃石」を展示した。

5 恐竜と星空

全天周映画の中で星の位置が移動する話がでることから、コーナーの内容は「移動する」とした。恐竜については、足跡、あしの骨、爪を展示、星空については、固有運動によって何万年も掛けて星座の星の位置が移動して形を変えていることをこども館のプラネタリウムを使い画像資料を制作して展示した。

6 隕石で絶滅？

大型モニターを設置して全天周映画のシーンを使い隕石が地球に衝突して恐竜が絶滅した説の解説動画を放映するとともに、隕石の展示を行った。

7 恐竜と遊ぼう！

展示物の75%以上が恐竜の化石となることから、化石に興味がないこどもでも楽しめるように、センサーに反応して鳴きながら動く「トリケラトプスの親子の大型模型」、ボタンを押して体の部位を動かせる「アンキロサウルスやスピノサウルスの恐竜の模型」、中に入って恐竜が生まれた時の気分になりきれる「大きな恐竜の卵の模型」などを設置し、直感的に楽しめる展示にした。

図2　恐竜で遊ぶこども達

恐竜展の展示の仕掛け

1 露出展示と床置きティラノ

恐竜展で使用した116点の展示物の中98点が地球博から借用した標本である。こども達に標本の迫力を伝えるため、地球博の好意で29点をケースに入れない露出展示にした。

その中でも、高さ120㎝のティラノサウルスの頭骨は、床置きにしてこどもの目線に合わせて迫力のある展示にした。

2 持って体感できる「脳ぐるみ」

手に持つことができない展示物の中で、唯一手に持って体感できる展示物として脳ぐるみを用意した。大きく重たい1,400gの「ヒト脳」と非常に小さく軽い200g（ヒト脳の1/7の重さ）の「ティラ脳」の実寸大で作った脳ぐるみは、見るだけでなく持つことで、こども達に驚きと実感を与える仕掛けにした。

図3　脳ぐるみを体感するこども達

3 キャッチーな解説パネル

解説パネルは、数と内容を最小限にした。書き方としては、キャッチーなワンフレーズ、説明は200文字以内で簡単な漢字を使いルビはふらない、必ず挿絵を入れ絵だけでも内容を理解できるといった三つの点を心掛けた。一見こども向けに作った解説パネルに思えるが、大人が興味を持てるように意識して作った。例年企画展は、親子連れが多く、恐竜展もそうなることを見越して親に興味を持ってもらい、親がこどもに展示を解説して親子の会話を楽しむように仕掛けた。

4 SNSでの情報の拡散を狙って

展示構成の中に「恐竜と遊ぼう」のコーナーを作った理由の一つに、こども達が楽しんでいて絵になる写真が撮れるポイントを考えていた。こどもが楽しむ姿を親が写真を撮ってSNSに写真をアップし、恐竜展の情報が拡散することを狙った。

恐竜展のアンケート結果

企画展は例年、来場者の満足度や市場調査のためにアンケート調査を実施しており、恐竜展についてもアンケート調査を実施した。

2018年（平成30年）8月20日から同月26日までの7日間を調査期間とし、恐竜展に入場の家族

又は小学生個人にアンケート用紙を配布し、退場時に回収する方法で346通を回収した。なお、家族に配布した場合には、大人に記入をお願いした。質問と回答（構成比率）については、次のとおりである。

■恐竜展の感想

・大変よかった	49.7%
・よかった	43.6%
・ふつう	3.5%
・少しもの足りない	2.0%
・もの足りない	0.6%
・無記入	0.6%

例年に比べても「大変よかった」が非常に高く、「よかった」を含めると93.3%が恐竜展に対して高い満足度になっている。

■企画展への来場経験

・初めて	71.7%
・昨年も	11.0%
・以前来た	17.3%
・無記入	0.0%

「初めて」の来場者は、例年6割程度であるが、恐竜展については、7割を超える高い構成比率になっている。

■全天周映画の観覧の有無

・観覧した	17.6%
・観覧する予定	25.4%
・観覧しない	56.1%
・その他	0.9%
・無記入	0.0%

「観覧した」と「観覧する予定」を合わせると43%の構成比率になっているが、恐竜展の期間中の全天周映画の上映は午前に1回だけだったことから、健闘した比率といえる。

■恐竜展の情報の入手

・こども館ホームページ	33.3%
・来館して知った	27.5%
・人から聞いて	11.9%
・こども館ニュース	9.0%
・チラシを見て	6.1%
・その他	12.2%

以前は、「来館して知った（こども館は知っていたが、企画展の内容は知らないで来館した）」が大半であったが、近年は、ホームページ等で事前に情報を入手する人が増えている。

■回答者（記入者）の住所

・藤沢市	36.4%
・横浜市	32.1%
・大和市	6.9%
・茅ヶ崎市	5.2%
・その他	19.4%

例年、藤沢市と横浜市で3分の2を占め、他の都市の合計で残りの3分の1となっている。藤沢市と横浜市に恐竜展の周知を図るように広報を行った結果、2市で7割に近い構成比率になった。

■回答者（記入者）の属性

・男	17.9%
・女	81.5%
・無記入	0.6%

■回答者（記入者）の年代

・小学生	12.7%
・20代	3.8%
・30代	45.4%
・40代	30.9%
・60代	3.8%
・その他	3.4%

回答者の属性及び年代を総合的に見た場合、子育て世代の女性がこどもを連れて恐竜展を利用することが多く、小学生単独での恐竜展の利用は多くないことがいえる。

おわりに

恐竜展は、23,293人の来場者とアンケート調査の満足度の高さから、多くのこども達に楽しんでもらえたと企画者として大変喜んでいる。

こども館は、こどもを対象としていることから、こども達が興味や関心を持てるモノに出会える場になる必要がある。様々なモノをジャンルを問わず、こども館はこども達に提供しなくてはならない。だが、限られた予算とスタッフの中で幅広いジャンルを網羅するには、限界がある。

限界を限界でなくし、こども達の満足度を高めるためには、恐竜展のように他の館園との協働や連携がこども館では、必要であると考えている。

今後も神奈川県博物館協会の繋がりをいかし、多くの人を巻き込みながら、様々な事業を工夫を凝らして展開していきたいと考えている。

最後になったが、この場を借りて支えていただいた多くの方々に心から感謝申し上げる。